

雜 錄

ケーベル博士論文集(獨文)

深 田 康 算

譯に一昨年から昨年に亘つて『思潮』誌上に其一部分が、久保勉君の綿密なる注意と献身的な努力に基ける精確な譯文に依つて發表せられた時、我讀書界の多大なる注目を惹起したケーベル博士の論文及び感想は、今年の二月に岩波書店から全部を纏めて其原文の形に於て一冊の論文集として出版せられた。題して Kleine Schriften. Philosophische Phantasien. Erinnerungen. Ketzereien. Paradoxien. von Dr. Raphael Koerber 云々。

其内容目録は

(I) Aufsätze.

(1) Zu Kants hundertstem Todestage. Eine philosophische Phantasie.

(2) Schiller-Psychagogie s.

(3) Eduard von Hartmann. Eine Erinnerung.

(II) Aphorismen.

(1) Gott und Welt.

(2) Kant.

(3) Varia.

(III) Fragen und Antworten.

Personliches. Menschen. Bücher. Romantik.

Über Romane, Musik und Musiker. Mein

Japan.

(IV) Vorworte, Reden, Briefe.

Anhang.

Schopenhauers Grundrissum.

Schopenhauers Mystik.

Jean. Pauls Seelenlehre.

此中(一)の下に收められた最初の三つの論文は博士が來朝せられて後、カントの百回忌(一九〇四年)、シルレルの百回忌(一九〇五年)、及びハルトマンの没年(一九〇六年)に夫々日本に於て“Waldheft”誌上に發表せられたるものであり、(二)及(三)に收められた最近の執筆に係る感想の大部分は、久保君の譯文を通して『思潮』を飾つたものである。(四)の下にはシャスラーの『美學』、クローネ・フイツシャートの『近世哲學史序論』、ルイピンスタインの『音樂及音樂者』、及びメレデューコウスキの『神々の死』等の邦譯に對する序文四

種、哲學科卒業生に對する告別の辭三篇、故齋藤信策君追悼辭一篇、及び書翰三通が收められて居る。最後に附録として載せられた論文三篇の中第一のものは、博士が日本に着任勿々哲學會で述べられた講演として、今は二十五年の昔にまで溯る。我邦に於ける博士の生活の最初の好き記念である。第二と第三とは博士が日本に來らるゝ前獨逸に於て發表せられたものであり、從つて博士の日本在住の記念を兼ねた此論文集には、或は適當なる場所を得たものとは云はれないかも知れぬけれども、孰れも我が思想界に於ては未開拓の領分に關する論文である點と、博士の思索の興味の一つの中心を雄辯に物語るものである點とに於て吾々に取りては興味多き賜物たるを失はない。

此四百頁足らずの、我邦に於て出版せられた獨逸書としては極めて誤植の少い、印刷の鮮明なさうして上品な製本である小冊子を手にした時、

—博士から吾弟子と呼ばれ吾子と呼ばれさうして又吾友と呼ばれる好運を持つたものの一人として、私が何を措いても先づ第一に感じなければならなかつたのは、先生の心の面影が、今は唯私達の弱い記憶の力の中に於てのみでなく、最早長く稍去る虞のなきやうに *Schwarz auf weiss* に而して *Portahil* に殘されることの出来たと云ふ嬉しさである。収録せられた論文と感想とは、量の上から見たなら、又之れを先生の學殖や研究上の仕事やを評價しようと云ふ立場から見たらば、固より十分に博士の全般を傳へて居るとは云へないに相違ない。併しそれは確かに私達の仰ぎ見た師として、交はつた友として、生きた一個の人間としての先生を最も能く傳へて居るとは云へるであらう。又固より、最後の審判の日に、先生が此書を振り翳して『余は斯くありき、余の總ては此裡に在り』と叫ばれるであらうとは、私の想像し

得ぬ所である。併し若し私の交友の中に『君の先生と云ふのは如何なる人であるか』と訊く者があつたなら、私は『私がそれを物語り得るよりもより以上に、此書が能く物語つて居る』と云つて此論文集を彼に贈らうと思ふ。事實多少でも博士に親炙したことのある人々は、恐らく此論文集の孰れの頁に於ても、博士の面目の躍如として現はれて居らぬ如き個處を見出し得ないであらう。——それは已に博士の自序に於て、否此論文集の第二標題 *Philosophische Phantasion, Erinnerungen, Ketzereien, Paradoxien*. に於て已に活々と吾々の眼の前に浮ばないで居ると云ふわけに行くまい。

*Phantasion*! *Ketzereien*! *Paradoxien*! 併し私の意は博士自らに依つて此書の特に斯く名けられたことが、直ちに吾々をして博士を彷彿せしめると云ふばかりではない。私は尙一步を進めて、博士の考へ方 *Dankungsart* そのものが如何なる話題に

就ても、如何なる形式で現はれるにしても、常に其特色としてファンタジに富めること、ケツェルライ的なること、パラドックス的なることの三つの性質を具へてゐると云ひたいのである。自家の論文集と感想録とに命名して敢えて空想と云ひ邪説と云ひ逆論と云ふことそのことは、一つの氣の利いた思ひ附きでもあり得るであらうし、又人の眼を惹くための誇張でさへもあり得る、孰れにしても必しも珍らしき、若しくは特性的なる、命名法とは云へない。唯博士の此場合に於てのみは、是等の標題は又直ちに——思ひ附きでもなく、誇張でもなくして——博士の考へ方の本質そのまゝを列り出して居る。其所に私は深い興味を感じざるを得ない。其所に博士の特性的なるものを私は見得るやうに思ふのである。Phantasia, Ketzerien, Paradoxien! これこそは、此論文集を最も能く定義してゐる詞であると共に、やがて又吾々の

追憶の中に浮び來る所の博士の面目を構成して居る著しい三つの要素（今暫らく人品から流れ出づる自らなる魅力を考慮の外に置く）ではないか。

併し是等の三つのものは、言説の單なる形式として之れを見るならば、思想の懈怠の花やかなる被覆に過ぎぬこともあらう、常に最新なるものを追ふ心の流行的所産なることもあらう、包容的ならざるも精神の異要素に對する外面的妥協たることもあらう、狹隘なる自我を固守する爲めの防禦的なる論理の技巧に過ぎぬこともあらう。さうして其所に想像的思惟や邪説や逆説やの、思索家に對する、誘惑と危険とが潜んでゐる。總ての Aphorismen の讀者と筆者との同様に經驗しなければならぬ所の緊張、及び其に必ず従ひ來る弛緩が、刺戟を與へると同時に倦怠を惹起するものも亦之れが爲めである。博士の場合に於ては、併し大に之れと趣を異にして居る。Phantasia, Ketzerien, Para-

torien が一方に於て單なる思ひ附や誇張に出でた標題ではあり得ないと共に。他方に於てそれは博士の思索の單なる表現の形式でなくして、其本質に屬して居ると云ふことが出來やう。私を見る所に據れば、博士の想像と邪説と逆論とは、單なる言説の形式としては屢(若しくは常に)さうである如き geistreiche Spielerei ではなくして、シムルハルの語を借りて云へば、*der Mensch spielt nur, wo er in voller Bedeutung des Worts Mensch ist.* の境地に於ける Spiel である。斯く見ることの外に、吾々は博士の此論文集の特性を理解することが出来ないであらう。斯く見ることより外に、吾々は吾々の親炙せるケーベル先生の總てを正當に領會することは出來ぬと私は思つて居る。斷はるまでもなく、私は今此論文集を機會として、博士の『人格的内容』を説明しようとする考も——力も亦資格をも持つては居らぬ。Hohe Subseinne

の著者が其父の面影を描くに於て確かに示して居る *synthetisch en ångän* (to truth it in love) の力は私には缺けて居る。而して博士は私に取りては何であるか、私の親しく知るを得た總ての生きた人々の中、博士の占めて居る又占むべき地位は何所にあるか、これが總勘定を試みるためには、私は未だあまりに私自身に就いての知識に乏しいのを感じる。加之此論文集の中に含まれて居る『眞理内容』を檢査すること、又神と世界と人と藝術と、さうして日本とに就ての博士の直觀的洞察の興味ある無數の閃きを列擧し紹介することも、今此に私の目論見とする所ではない。此論文集を未だ手にしない人々のため及び博士に親炙する機會を持たぬ人々のために、紹介の詞として私が此所に特に書き記して置きたいと思ふのは、唯次のこと丈けである。『私は私の知れる限りに於ては、ケーベル博士に於て、所謂「美しき魂」Schöne Seele の型

に處する唯一人の生きか個性を見た』と。

ちうして私の此考を恰も裏書せられちうとしたのでもあつたかのやうに、同時に又博士の全貌を博士自ら一二頁の中に要約するの意を辭せられなかつたかのやうに、*LA phorismen, Gott und Welt, S. 82 ff*に於て、私は次の個所を發見する。これこそは吾々に此論文集眺めらるべき正當の見地を提供するものであり、又博士を知らうとし博士に親ちうとする人々に取つて好箇の指標たるべきものであらうと思はれるからして其全文を左に轉載し置く。

Wer einmal die Überzeugung vom Dasein Gottes, des lebendigen, persönlichen, gewonnen und die Moral des reinen christentums für die einzige Norm aller menschlichen Handlungen anerkannt hat, kann von den Philosophen und Theologen schlechthin nichts mehr lernen, keine neuen und workvolleren Anschlüsse erwar-

ten. Ihre Werke werden für ihn einen lediglich historischen, literarischen, ästhetischen oder philologischen Wert haben, und er wird sie genau so lesen, wie er auch andere Bücher, namentlich Dichter liest. Denn Philosophie ist Kunst, Dichtung, *μετέωρον μουσική*, wie Plato sie nennt, und die philosophische Literatur ist überreich an unvergänglichen Werken in allen Stilen und Gattungen der Poesie.—Hegels „Phänomenologie des Geistes“ z. B.—was für ein herrliches Epos! Auch Lotzes „Mikrokosmos.“ Nicht viele Dichtungen kommen an Phantasie und Sinnigkeit Rechners „Zend-Avesta,“ seinem „Eüchlein vom Leben nach dem Tode“ oder seiner „Nanna“ gleich. Prachtvolle Lyriker sind Descartes in seinen „Discours“ und den „Meditationes,“ Fichte, Nietzsche... Dramatisch ist Lessings Denken und Schreiben. Und erst Platon, Augustin, Schelling, Schopenhauer:—sie sind Wollen, in denen auch das Falsche und

704  
Verkehrte gross ist, selbst, wie bei Augustin, das

Abtossende und Hässliche.

Ich meine, nur der in seinem religiösen Glauben Gefestigte, der da eingeschauen hat, dass „dieser Welt Weisheit Torheit bei Gott ist,“ dürfte vom Studium der Philosophie und Theologie einen reinen, ungetriebnen Genuss haben, da er sich zu ihren Systemen und Hypothesen bloss betrachtend, wirklich *sine ira et studio* verhalten kann,—wie wohl ein abgeschiedener Geist auf das Weltgetriebe herabschauen mag, das ihn nicht mehr berührt.—Warum so ernst und schwerfällig menschliche Dinge aufnehmen? Der „Herr lacht ihrer“ doch! Wozu—als wenn dies überhaupt möglich wäre!—jede philosophische Ansicht gleich auf ihren *Wahrheitsgehalt* hin prüfen, ihr durchaus wissenschaftliche, ethische, religiöse Werte zu-oder absprechen? Dies ist eine Befangenheit, die keinen ruhigen geistigen Genuss, keine objektive Betrachtung

ankommen lässt. Warum sollte man nicht, ohne jegliche Gefahr abtötend zu werden, vom Christentum und überhaupt von jeder Religion und Moral ganz abscheidend, z. B. die christliche Glaubenslehre von David Strauss, oder seinen Allen und neuen Glauben, oder Fr. Vischer und Nietzsche lesen und bloss literarisch und ästhetisch werten, ihren Scharfsinn, ihren Witz, ihre Dialektik, Phantasie und Sprache, ja ihre Schriften anfrichtig bewundern und lieben können? Lesen wir doch in unseren Museen einmal auch einen Lukian oder Boccaccio, Wieland, Marquessant und dgl. mit harmloser Freude und fragen nicht viel darnach, ob sie moralisch sind oder nicht. Erzählen sie mit Anmut und Geist, so genügt dies zu unserer Unterhaltung! Man muss moralisch schrecklich heruntergekommen sein, um immer an Moral und Tugend zu denken und davon zu reden!  
„Herzlich ist mir das Laster zuwider, und

doppelt zuwider Ist mir's, weil es so viel  
schwalzen von Tugend gemacht. "Wie, du  
hassst die Tugend?"--Ich wolle, wir üben  
sie alle, Und so spräche, will's Gott, ferner  
kein Mensch mehr davon." (Schiller)---

„Das Moralische versteht sich immer von  
selbst,“ sagt Vischers „Auch Einer“, sollte  
nicht aber auch das Christentum sich in unserer  
Kulturwelt immer von selbst verstehen? Noch  
nicht tief sitzt der Glaube bei dem, der ihm gar  
zu ängstlich hütet und sich vor jeder Berührung  
mit Andersdenkenden verschliesst!

『一たび活ける人格的なる神の存在に就ての確  
信を獲、さうして純なる基督教の道徳を以て、  
一切の人間の行爲の唯一の規範なりと認識した  
人は、哲學者や神學者からは最早それ以上に學  
び得る所は全然なく、何等の新らしき又一層價  
値ある解明(幽暗なるもの)(隠微なるもの)をも期待することは出

來ない。彼等の著述は斯の如き人に取つては單  
に歴史的、文學的、美的乃至は言語學的價値を  
有するに止まるであらう、さうして彼は此等の  
著書とば他の書物特に詩人の作品を讀むと全く  
同じ態度で讀むであらう。蓋し哲學は藝術であ  
り、詩歌であり、又プラトンの呼べるが如く、  
最高の藝術であつて、哲學上の文獻は文學上の  
あらゆる文體と種類とを以て書かれたる不朽の  
作品に極めて居るからである。——例へ  
ばヘーゲルの『精神現象論』の如き、——實に絶  
妙なる叙事詩ではないか。ロッツェの『小宇宙』  
の如きも亦同様である。詩的想像の豊かな點に  
於て、フェヒナーの『ツェンド・アヴェスタ』と『死  
後生活觀』とに匹敵し得るほどの文學書は多く  
はない。フイヒテと、『方法論』並に『瞑想録』の  
著者としてのデカルトとは優秀なる叙情詩人で  
ある。プラトーン、オーガステイン、シェリン



グ、シヨイペンハウヰ、ニイチエの如きに至つては、今更云ふを俟たない。——此等の偉大なる詩人の『作爲と眞實』の中に於て我等は一切のものを見出す、さうしてその總ては偉大である、虚妄なるものや背理なるものと雖も、否オイガステインに於けるが如く、嫌厭すべく又醜惡なるものでさへも。

『思ふに、哲學や神學の研究から、純粹な曇りなき悦樂を享受し得る者は濁りその宗教的信仰の已に確立し、「この世の知慧は神の前には愚昧なる」ことを洞見した人のみであらう。何となれば彼は種々の體系や假説に對して單に觀照的態度を、實際「憤怒や黨派的熱心を超越した態度」を把持し得るから、——亡靈が最早自分とは何等の交渉なきこの世の營みを下瞰する時の態度は恐らくこれに類したものであらう。——何がためにしかく眞面目に又重々しく人間の事象

を見るのであるか。「主は彼等を嗤笑ひ給ふ」のに。何が爲めに——恰もそんな事が可能であるかの如き態度を以て——何れの哲學説を捉へても、直ちにその眞理内容如何を檢し、それに向つて飽迄も學術的、倫理的乃至宗教的價値を承認若しくは否認しやうとするのであるか。是れ即ち何等の靜平なる精神的享樂をも、何等の客觀的觀照をも容るゝの餘地なからしむる所の、一種の囚はれたる状態であると云はなければならぬ。何うして我等は何等不信に陥るの危険なくして、基督教及び總じて何れの宗教や道德より全然眼を轉じて、例へばダーヴィット・シュトラウスの基督教信仰論もしくは彼の新舊信仰論、又はフリドリッヒ・フィッシャーやニイチエなどを讀み、さうして其を單に文學的に、又美的に評價し、彼等の犀利や、彼等の機智や、彼等の辯證法や想像力や文章のみならず、更に進んで

彼等の奇想に至るまで、心からこれを嘆賞し愛好することが出来ないのであらうか。閑散な時には我等はやつぱり無邪氣なる歡喜を以てルキアーン若しくはポッカチオやヴィーランドやモイバッタンと云つた様な作家をも讀み、さうしてその道德的なるや否やに就ては多く問はないではないか。彼等にして優雅に又卓拔に物語つて呉れるならば、我等の享樂には最うそれで充分なのである。常に道義と徳とを念とし又これを説く者は、道德的に恐ろしく墮落して居るに相違ない。

不徳は心よりいとはし、而して尙二倍いとはし

そはかくも多く徳について饒舌を弄せしめたれば、——

『そもそも何ぞや、爾は徳を思むにや』——

わが願ふところは、我等すべてが徳を行ひ、

而して今よりのち何人もそを説かざるにあり。(シルレル)

「アウホアイナー」の云ふ如く『道德は常にあつと解つて來る。』然し基督教も亦現代の文明

世界に於ては常にあつと解つて來るべき筈のものではなからうか。その信仰を護ること餘りに小心に過ぎたり、自分と考方の違ふ人々には少しでも接觸しないやうに自己を閉鎖する如き人の信仰は未だ充分深い根を張つて居るとは云はれない。』(『思潮』大正六年十一月號一六頁以下參照。)

右の譯文をも特に附け加へて此處に掲げたのは、一つは『思潮』が一度廢刊となつた今日或は再び該號を手に入れ難いであらう人々の爲め、一つは久保勉君の譯文が如何に苦心の餘に成つたか、如何に忠實であるかを證するため、さうして一つは又原文が如何に、如何ほど勝れたる譯文に依りてさへも、移植し難い趣を此場合に限らず持つて居るかを考へて見たい又貰ひたい爲めである。但し久保君の譯文は原稿に基いたものであり、印刷せられた原文は其後更らに又博士自らの訂正増補

を経たものである。前掲の原文と譯文との間に存する何人も認め得るであらう所の、二三の出入は此事情に歸せらるべきである。譯文の addition Jenkins は近い内に、之れも亦岩波君の店から出版せられる運びになつて居る。

### 彙報

京都帝國大學文學部哲學科大正八年

年度卒業論文題目

#### 哲學專攻

判斷の意味と對奧

プラトーン氏靈魂説

意識過程に於ける自覺と純明

#### 印度哲學史專攻

無畏壽經の研究

釋尊の根本教理

密教の哲學的基礎

#### 支那哲學史專攻

三宅剛一

村主岩吉

△濱田與助

大地原誠玄

藤谷宗順

△中井龍瑞

#### 二程子論

#### 倫理學專攻

アリステテレスの徳

荀子の道徳觀

#### 教育學教授法專攻

フレイベルの研究

國民教育

不良少年研究序論

#### 美學美術史專攻

寧樂朝彫刻史論

#### 宗教學專攻

原始教會とパウロ

真宗の起源

保險と現業とに就いて

#### 社會學專攻

生存權の社會學的考察

武士道の研究

貧困より犯罪に進行する社會心理過程の研究

△平田福初

河畑立詮

△三井金一

末包留三郎

榎塚卯助

秋山眞造

△伊勢專一郎

菅岡吉

阿部現亮

清水曉昇

大澤鷲雄

香澤吉太郎

△梶尾密道